

イチゴの表皮 2

いちごのかわ

LULU

キスツケタイ。。。。



その影響力の肝。

人に影響を与える、それはカマンベールチーズにクルミをのせたぐらいの高揚感。それはまるで背徳的な蜜の味。

とまあ要するに、「知らないうちに人に影響を与えていた、なんてエピソードが欲しい」というオハナシをブレンダーで滑らかにするとこんな感じの表現になるのだけれど、その昔大好きなアーティストが、自身が芸術に目覚めるきっかけをこう語っていた。

「当時付き合っていた彼女が絵画が好きで、よく美術館デートをした。そこが原点」
なのだと。

恰好いい。そこはかたなく格好いい。その彼女。

名の知れたアーティストのスタート地点をおぜん立てした気分とはいかなるものか。

いや、そんなホンマモンにおしゃれで超然とした女子なのだから、こんなことでは浮かれようもなく、ただ穏やかに今日も誰かにそっと影響を与えているに違いない。

素敵だ、エピソード泥棒したいぐらい素敵だ。

そういえば、撮った写真を見せ合い、感想を言い合ったアルバイト仲間は写真家になる夢を花開かせただろうか。今のところ取材の申し込みもないし、自伝にコメントを寄せていう依頼もないので、わたしの影響履歴はいまだ公に(秘密にですら)更新されない。

「有名になったら、こうやって語り合った仲間のことをぜひテレビで言ってね」
と念押ししておいたので、まだ夢の途中なのだろう。

そもそも、こんなことをお願いしていること自体がセコい。おしゃれな影響女子の称号はいただけないに違いないぐらい、セコい。何なら「ここにいた！セコい女子図鑑」の表紙を飾れるぐらいセコい。
いや、表紙は無理か。

とにかく、私の欲望は続く。

その昔、映画好きなのをいいことに、片道2時間かけて名古屋の単館上映を観にいたり、マニアックな劇場を探しては出かけて行ったりしていた。かれこれ10年以上前の話なのだけれど、当時付き合ってくれた人はさぞかしいい迷惑だっただろう。自分自身に酔っていた感は否めない。

もちろん今も昔も映画は大好きだけれど、そして今も単館上映もののような少くせのある邦画が大好きなのだけれど、後付け感は多少認めよう。

一度、最前列が座布団だった映画館に行ったときは震えた。これはなかなかいい感じにムードのあるエピソードではなかろうか。そんなところで観る映画もこれまたオツよね〜などと唸るわたし。何かいい感じじゃない？

と決まったところで、視点を変えてみよう。

こんなにビバ影響を叫んでおいて何なのだけれど、自分の記憶では「この人に影響を受けた」という明確な記憶はない。もしかしてこのそこはかたない欲望は自分がそういう体験をしたいという願望の裏返しなのか

も

しれない。

がつーんと脳天にくるような打ち上げ花火型、いやじわりじわりと「そういえばあのときのアレはこれだったのね」という思い返し型、どっちでもいいけれどやられてみたい、ホトトギス。

もしかして世の中にはそんな出来事はゴロゴロしていて、ただ自分がそれを漏れなく受け取るという準備ができていないだけなのかもしれん。ふむ。

もう両手広げてお待ちしておりますんで、ひとつ。刺激のある岐路をどうか。

でも、今更刺激のある岐路に立たされて、果たしてどう動けるかは・・・甚だ不安であります。

その役割の肝。

年末にテレビを観ていたら、何と中森明菜ちゃんが歌番組に出演していた。

彼女の歌は素晴らしいのだけれど、その感受性が唄うことを妨げているのか、近年では露出がすっかりなくなってしまった。ファンとしては寂しい。とても寂しい。

その歌番組では、薬師丸ひろ子にいたく感激してしまい、久々の明菜ちゃんだったのにあまり印象深くなかったのが非常に残念だけれど、何を隠そうわたくしは明菜ちゃんなのであります。

何言ってんだ、この女。というそのアナタ。少々お待ちくださいませ。

その昔、小学生の頃。仲良し女子4人でよく遊んでいた。そのうちの1人のおうちがとても広い一軒家だったので、そこに集まってよく「ザ・ベストテン」ごっこというのをやっていた。まあ他愛も無い小学生の真似っこ遊びだったのですが、ちゃんと役割が決まっていたのです。

そこでのわたしは明菜ちゃん。他の子はそれぞれに、松田聖子ちゃん、石川秀美ちゃん、柏原芳恵ちゃん(紅茶の美味しい〜喫茶店♪)と決まっていて、それぞれの持ち歌をちゃんと披露していた。

わたしの周りでは、明菜ちゃんの新曲が出るとまず「どんな歌なの〜？」とわたしに聞いてきたものだった。何とまあつたない明菜ちゃんが、勝手に新曲披露(でもサビの部分のみのうろ覚えだったりするのだけれど)するという、なかなかオツなお遊び。

明菜ちゃんの新曲の衣装を意識して、なんちゃって革手袋(指先が切れてるのね)買って用意したり、まわりもちで黒柳徹子役をやったり、今思えばなかなかの完成度。そう、小学生といえど女子はクオリティーにうるさいのです。

なんて言っていたら、カラオケ行きたくなってきた。最近の若者は、70年代80年代の曲も躊躇なく熱唱するのだそう。何故かと言えば、昨今のカバーアルバム乱立で案外昔の歌を知っていたりするのと(ネットで原曲ダウンロードできる時代)、どうやら最近の歌は難しいので唄いやすいと思われる要因があるとのこと。

まあオンチで音域が狭いわたしからすると、松田聖子ちゃんですでに息切れ高音NGの超難関楽曲に数えられてしまうのですが、イマドキの曲はもっともっと難しいらしい。最近の歌なんてさっぱり唄えないのでわからないのだけれど・・・

それにしても明菜ちゃんを自称していた割に、さほど繊細な感受性を持ち合わせていなかったわたしは、今も昔も楽天的で能天気なのだけれど、明菜ちゃんには復活して欲しいと同時にひとことだけ言いたい。

明菜ちゃんの新曲、もう少ししっとり大人楽曲でも良かった気がするー。

ささやかな一般人の意見でした。あ、山口百恵も熱唱したいわ。

その三姉妹の肝。

前項で、薬師丸ひろ子ちゃんの話が出たのでこの話をしよう。そう、角川三姉妹のオハナシ。

わたしは邦画が好きで、とくに80年代には角川映画に夢中になったものです。そこで活躍していたのがご存知角川三姉妹。

それ、どこの三姉妹？という人のために、一応説明しておきますと、三姉妹の内訳は、薬師丸ひろ子・原田知世・渡辺典子(敬称略)のお三人様で、地方では角川映画は二本立てが基本でしたので(というか、この頃の映画は常に二本立てだった記憶があります。今思えばお得～。けどちょっと疲れる)、シーズンごとでこの三姉妹のうちの2人がそれぞれ主役を張って、角川映画を盛り上げていたものです。

わたしなぞ、サントラ盤(何とレコード!もう手放しちゃったな・・・)まで買っちゃったもんね～。もちろんパンフレットも!あの頃は映画館に大行列が出来ていて、早朝から映画観るためだけに街まで行ったものです。と、ホコリかぶっている話になってきたので戻して・・・

何といたしますか、あの頃から貫禄ある熱演で三姉妹のお姉様的存在だった薬師丸ひろ子。

久しぶりに里見八犬伝を観たときに、その合成の完成度に時代の流れをしかと感じ取ったわたしなのでありますが、当時は京本政樹様のきらびやかさにうっとりしたものです。

野村宏伸のつたない(初々しい)演技が光った「メイン・テーマ」、劇中劇という斬新な設定が衝撃の「Wの悲劇」、「探偵物語」なんて松田優作との共演なんですよ!今思うとすごい・・・

いっぽう、清潔感溢れる存在感が光っていた原田知世。今やもう、スウェディッシュポップで新風吹き込んでいい感じふわふわマシュマロちっくな存在感で抜きん出ております。出過ぎず、離れ過ぎず、何ともいい感じの安定飛行で大人女子の理想形!セーラー服の女子高生から大人の女へと階段を登って行く女性といった、お姉さんというよりは等身大の女性を描いた作品が数多かった気がします。

今やもう、その澄んだ空気が別の女優の顔を作っていくという理想的な流れの中にいる、希少な存在ではなかろうか。あんな女性を目指している40代って結構いると思う!

その昔、原田知世さんに似てると言われたことがあって(今思えば髪型か?)、でもあまりに違う壮年期に驚愕するのであった・・・ここが芸能人と素人の違いだろう。

そう言えば後だしでお姉さんでできてたよね。1人が突出するとそこにずるずると付いてくる姉妹作戦の走り(?)お姉さまのほうがしっとり和服美人的なお顔立ちだったけれど、はてすっかりお姿見かけない。

そして今やあまりお姿お見かけしなくなってる(昼ドラ世界のほうが多いのか)渡辺典子。正当派美人って一番、40代への脱皮対応が後れてしまうのだろうか。出演作を見ると、結構ミステリーが多かったのね。美人が驚愕する様ってスクリーン映えするのか。これって男子の欲望?。

「晴れ、ときどき殺人」では主題歌唄ってたけど、「はーれ、ときどきキルミー♪」とか今思えばすごい歌詞！ポップな仕上がりだったと記憶しているけど、やるなあ角川。

黄金期を支えた女性たちはそれぞれに活躍しているけれど、今はもうこういうスタイルの映画ってないですね。主役が誰か、原作が何かが重要で、この会社の映画は毎回観るといえば観てからの楽しみのことはなくなりましたねえ。なんか寂しい……。

会社のこととか、芸能界の派閥などは一切知らないけど、二階堂ふみ・満島ひかり・清野菜名三姉妹の順番主演映画なんかがあったらいいな～。それぞれの映画にそれぞれがちょこっとずつ出演。その隠し球の楽しみも込みで、一時間ずつの二本同時上映でいかがでしょう。

シネコンでなくていいから、小さな劇場でじわじわと育てていく。いや、女優陣はもうすっかり育っちゃってる方々だから、監督または脚本家を実力ある新人を起用、そこから羽ばたけ、やれもっせー。PFFにも負けないこの企画。

ああ、観たい。そういうの観たい。または脚本書きたい、監督は大変そうだからそっと裏方したい。ぐー。

その舌の肝。

ブログなどで、食べたものや美味しいお店などを書き連ねていると、多々勘違いされてしまうのが「グルメな人なのね」ということ。

素材にこだわり、毎日の飲食に気を配り、お店を食べ歩いて見極める・・・うむ、この店この材料はあそこのを使っていて、ここに味のアクセントがあるのだな、と目を瞑りながらそっと語る、なんていう輩ならば(誰だそれ)、舌が確かなグルメ野郎ということになります。こちらら雑食系でございまして、時々何食べていいかわからん、何作っていいかはもっとわからんスパイラルにはまってしまうという、迷走舌野郎なのでございます。

なので食べに行くお店を決めるときに「このお店、気に入ってもらえるかわかんない・・・、大丈夫かな、いや何ならそっちがオススメ言ってくれないかしら」と怯えていただいってしまうと誠に恐縮しちゃいます。

ついこの間もみなでお茶を愉しむという会があったのですが「さあ味の感想を書き留めてください。それでお茶が覚えられますよ～」と言われても、全く言葉が浮かばない。美味しいとかあったまる～などまことに貧困な表現しか思い浮かばない。それゆえに全く覚えられない、とまたもや仕方ないスパイラルへ突入なのでございます。

この調子で、よくいただくお酒についても知識がついてこないというお粗末さ。

どこのワインが好きなのー？何が一番美味しかった？

なんて聞かれてしまうと、ぐっと言葉に詰まってしまう・・・ごめんなさい、これまでいただいたワインたち。どれもこれも案外美味しくいただけております。よく、テレビ番組の格付けチェック(年始などにスペシャルで放送され、ガクト様や叶姉妹のセレブ度だけが際立つ番組)などでワインの飲み比べをしている際に、高い100万円程度のワインと比較して安いほうが5,000円というのがあります。いや～普段飲んでいるのでも5,000円と言えればいいほうに分類されちゃうな～。やはり芸能人の方は生活レベルが違うのね。

とうら寂しい気持ちになったところで、味の表現のオハナシ、

まあ飲食店のレポートの達人のように、「まるで～のような～」などとワインの講釈のように表現することが必要なのかと言えばあまり賛成しかねるところであります(時々アレ邪魔だなあ。録画のときは感想の場面だけ飛ばすこともあるぐらい)、それでも過去に食べた何かに似ている、とか、自分の感覚のどこに響いて、何に感動しているのかぐらいは的確に知りたいと思う。それってきっと、自分のことがよくわかっている。感覚をコントロールできているということだと思ふ。

あまり固定観念に縛られるのも何だけど、自分を知っているということは必要だなと思うこのごろ。そうすれば、何をすれば体が心が悦ぶのか、わかった上で選択できるということですね。

時々それを見失うワタシ・・・案外もういいトシなのに。

この間、この食材を摂取すると自分の体にどういふ変化が起こるのかよく観察していると、体に合わないものがわかってくる・・・と聞きました。そう言えば、何となく胃が重かったり、頭痛がしたり、食後におこる変化を体験した記憶、あるかも。それが腐っているとか、古いとかいうのではなくて(それがわからなくなったヤバイ～)、自分には合わないイコール摂取してもいいことがないということ。

今は、いろんな食材を選べるし、調味料や調理方法など選択肢があり過ぎて、それぞれ体感するのが難しい中で恰好いいじゃないですか、「いやね。美味しいと思うんだけどわたしには必要ないの、これは」みたいにしたり顔で微笑むの。いや、それってウザい女？もしかして。

いろんな情報に左右されて、毎朝野菜摂ったり、ジューサーにかけてみたり、温めたり、生のままで山盛りにしても迷走してばかりですが、我が味覚が「コレだ！」とビリビリ悦ぶみたいなもの、この先きっと見つかるよねえ。

そう言えば、老眼の症状が出始めて久しかった頃に父親が、じっくり眺めてから大丈夫と判断していたパンがカビでいて、慌てて奪い取った記憶がある～。何かを見極めた上で、基本的な見誤りには充分気をつけなければならないと自戒するわたしなのであった。